

系統的な学習で自力学習のできる子どもを育てる国語学習

【研究代表者】伊澤 真佐子（和歌山大学教職大学院）

【共同研究者】森下 まちこ（和歌山大学教職大学院）

米田優介（和歌山市立四箇郷小学校） 田中美羽（和歌山立浜宮小学校）

宇治田乃（教職大学院学校改善マネジメントコース大学院生 和歌山市立小倉小学校）

はじめに

本年度、新型コロナウイルス感染症対策により約2か月休校となった。その間、学校は、定期的子どもたちに配布する家庭学習の課題（いわゆる宿題プリント）づくりに追われた。実際、算数科では前学年までに学習した内容の復習が多く、国語科も漢字の復習・予習が大半を占めたようである。新学年の学習内容を家庭学習の課題にすると取組が困難であると予想されたため、既習の学習内容に絞って休校期間中の家庭学習課題を設定したのである。

しかしながら、休校期間が延びれば延びるほど、事前に家庭で一定の学びを作っておくことの必要性が見えてきた。このことが、学校再開時における指導時間の短縮はもちろん、子どもたちの学びの広がりや深まりにつながられると考えたのである。

そこで、2つの取組みを両輪で行うことにした。1つは、前学年までに指導してきた指導事項を教師がもう一度見直し、子どもたちに再確認させ、新たな学びの基礎をつくるための課題を作ること。そして、もう1つは、家庭で、1人で自分なりの学びを作った子どもたちが、学級集団の中でその学びを広げ深めていことのできる授業づくりである。

以下、2人の先生方の実践事例を挙げることにする。

1. 和歌山市立四箇郷小学校 米田優介教諭実践

6年「イースター島にはなぜ森林がないのか」

R2. 6. 16 実践

めあて：論の進め方をとらえる

これまで、説明文教材を文章の構成をおさえて読んできている。ここでは、筆者が自分の考えをどのように工夫して述べているのかという論の進め方に着目することで、より深く文章を理解することを学習する。米田教諭は、論の進め方に説得力をもたせるためにはどのような構成にすればいいかを各自考えさせることに重点を置き実践した。休校中には家庭での課題として構成や要旨を捉えるワークシートを出したが、思ったほどできていなかった。

そこで、3年生で学習した説明文「すがたを変える大豆」の教材で事例の並べ方の工夫を学習したことを復習しながら、文章構成を考えることとした。また、ゴールとする言語活動は、論の進め方についての感想・意見を含めて「筆者に手紙を送ろう」として取り組んだ。

本時のめあて：「すがたを変える大豆」と比較しながら、「イースター島にはなぜ森林がないのか」の構成の工夫について考える。(4/6)

1.1 「すがたを変える大豆」を入れたことについて

授業記録から

(3年生の時勉強した「すがたを変える大豆」の写真を出して)

T: 大豆、黒豆・・・ときて、もやし(写真を並べる)「すがたを変える大豆」はどんな順番で並べていた?

C: 食卓に出てくる順。

C: わかりやすさ、見た目、形。
 C: 豆の形のままと変化している順。
 T: (写真をまとまりごとに固めて分類する)
 国分さん(筆者)は、この説明文で何を伝えたかった?
 C: 大豆はいろいろなものになる。
 T: 1分間とります。国分さんはこの文章で何を伝えたかったのでしょうか?考えましょう。
 C: 昔の人の知恵はすごい。
 C: 大豆は多くの物の力を借りて色々変わる。
 T: 大豆って、昔の人って、すごいと言いたかったのですね。

本時の最初に、「すがたを変える大豆」の筆者が論を展開するのに、根拠となる例をどのような順で並べていたのかを思い出させた。この部分の実践から

良かった事項

- ・3年生の時に、気づいていなかったことも今なら気付くことができる。
- ・論の進め方の工夫は、事例を並べる順に着目して考えるといいことを印象付けられる。

改善すべき事項

- ・主教材の理解を助ける手段として復習教材を用いたがこれを目的化している児童もいた。であった。この後も例を示す順番を意識するために上段に板書を残して授業を進めた。



写真①【「すがたを変える大豆」構成の復習】

1.2 文章全体の構成を捉えることについて (具体例を挙げる順序に着目して)

T: イースター島の話にもどります。鷲谷さんはこの中の森林がなくなった理由にどんなことをあげてたっけ?
 C: 環境破壊の例。
 C: ラット。
 C: 生活のために木を切り倒した。

T: いろいろあったね。どんな順で出てきた?
 C: ラットから。
 C: ラット最後や。
 C: 噴火。
 C: 農地。
 C: 次は丸木舟。
 C: 宗教的・文化的。
 T: ここで、モアイ像がでてきたね。
 C: その次ラット。
 T: ○○君が言ってくれた環境破壊ってどこからどこまで?
 C: ⑧から⑳、㉑あ、ちょっと考えます。
 C: ラットは入る?入らん?(入る)

この話し合いで、ラットの役割が何かについて気になる子が多くなってきた。

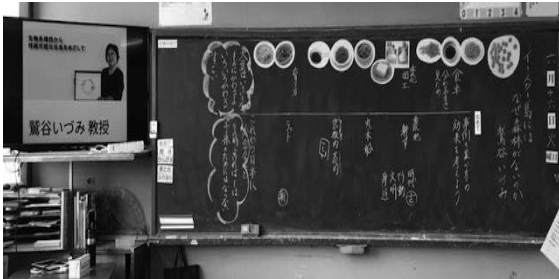
T: 一番初めに、筆者の一番言いたいことに線を引いたのを覚えている?
 C: 終わりの27段落。
 T: もう一つあったね。
 C: 25段落。
 T: どんなこと?
 C: その時、自分が良くても間に合っても、これから生まれてくる子孫のことも考えて行動せなあかん。

ここで、授業者は、要旨を押さえている。説明文を構成するのに、要旨を伝えるための工夫をどうしているのかに気付かすためである。

1.3 筆者の紹介に、キャッチコピーを使ったことについて

T: 鷲谷さんは、そのことを伝えるためにこう並べました。これは、読み手に取って効果があったのかということを考えてみたいと思います。
 (めあて) 事例の並べ方の効果について考えよう
 T: 国分さんは、大豆ってすごいで、ということを伝えるために分かりやすい順に並べました。鷲谷さんは、「その時さえよければでは、子孫のためにならない」と言いたいのですよね。
 農地、丸木舟、宗教的・文化的(モアイ像)、ラットとあげて結局これを言いたかった。
 C: 時代って、黒板の右が前で左が最近ではないけど・・・そういうこと?
 T: これを見て。【画面に映す】鷲谷さんの顔と『生物多様性から持続可能な社会をめざして』

C: 大きいものから、小さいものかな。
 T: 大豆の話は、わかるね。だんだん加工されてこれも大豆?という順で、すごいな、ってなるね。鷺谷さんのキャッチコピーからも考えて。



写真②【左・筆者からのメッセージ 生物多様性から持続可能な社会をめざして】

C: 時代が古い順。
 C: 行動をおこした順番。
 C: 文明を築いた順。食糧生産とか。
 C: 身近な順。農地とか自分たちの身近にある。ラットや宗教的なことと比べたら身近にある。
 C: これからの日本に必要なことを考えて、説明文にしたけれど、どうしたら飽きずに最後まで読んでもらえるかを考えて書いた。
 C: 大切さか。農地はいるし、丸木舟はいるし、ラットはいらない。
 C: ラットで話が始まって、ラットで終わっている。ラットは何をしたのか。ラットのことが気になって読んでいくと最後に出てくる。
 C: でも、モアイ像が題名にない。モアイ像そんなに大切かな。
 C: そうや、農地は、いる。丸木舟、いらん。宗教的はいる。ラットはいらん。
 T: じゃあ、丸木舟とラットはいらないの? (板書から消す)
 C: 最後、ラットが木を食べたから木がなくなった。木がなくなったのは、ラットがいたから。
 C: 農地とラットが中心なのは、この2つも原因。
 C: 丸木舟も原因やけど。
 C: じゃ、宗教的なことはいらない。でも、仏様みたいか。じゃ、いるわ。
 T: 今日は、時間もきているので、並べ方の効果とか筆者の意図について書いてください。

この単元では、筆者は、何を伝えたかったのか。そのための具体例として、事例の並べ方の

効果を考えさせたい。そして、「人間が文明を創っていくときに、こういうことを考えなくてはならない」「私たち一人一人にかかっている」「先を見据えた文化を創らないといけない」と捉えなければならない。

この実践を通して、6年生で自力学習ができてほしいこととして、

- ・序論・本論・結論に分ける。
- ・問いと答えを見つける。
- ・要旨をまとめる。

の3つが挙げられる。そのために、1年生から5年生までで、どのような力を付ける必要があるか整理し、6年生のこの時期には上の3つを家庭学習でき、学校で確認していくと言語活動も充実するのではないかと考える。

2. 和歌山市立浜宮小学校

5年生担任田中美羽教諭実践

「注文の多い料理店」(東京書籍)

R2. 10月実践

めあて：表現のくふうを見つける。

5年生になってから、2回目の物語文である。1学期には「世界でいちばんやかましい音」で、山場で起こる変化について考える学習を行った。この際、物語の構成や場面の役割を中心に考えてきている。これを生かしたワークシートを作成し、課題として自力学習に取り組んだ。(図①)

物語の構成	現実では何い	本業の話
二人の若いしんしは、丸木舟、いらん。宗教的はいる。ラットはいらん。	二人の若いしんしは、丸木舟、いらん。宗教的はいる。ラットはいらん。	二人の若いしんしは、丸木舟、いらん。宗教的はいる。ラットはいらん。

上段右：読んだ感想
 上段中：あらすじ
 上段左：二人のわかいしんしはどんな人物か
 下段：物語の構成

図①【既習事項を使った予習プリント】

くふうされた言葉や表現を見つけ物語のおもしろさを解説しよう

1. 物語のあらすじをつかみ、感想をもつ。
2. 物語の構成をつかむ。
3. 二人のしんしはどんな人物なのか想像する。
4. 戸に書かれた言葉についてくわしく読む。
5. しんしたちの気持ちの変化を読み取る。
6. さまざまな視点から、表現のくふうを見つける。
7. 物語のおもしろさのひみつを解説する文を書く。
8. 読み合い、感想を伝え合う。

図② 【学習計画を示して】

自学習で取り組んだワークシートを基にしながら学習計画を立て、目標とともに可視化して学習を進めた。

子ども達は、物語の構成や山場を前の物語単元で学習したのをよく覚えており（教室に掲示として残している）それを見ながら考えることができた。自力でしっかりとできたと感じる人数はまだ少ないが、少しアドバイスすることや予習として一度考えていることで授業は深まりやすかった。

3. 「書くこと」領域における表現様式別系統表

宇治田教諭が、「書くこと」領域における表現様式別系統表を作成した。

- ・意見文・論説文・提案文
- ・新聞・放送原稿・パンフレット等
- ・手紙文
- ・報告・観察記録文
- ・創作文
- ・説明文

である。この系統表を指導に活かして当該学年で付けるべき力を確認しつつ、指導計画を作ることが大切であると考える。

紙面の関係上、表にしたものを一部文章で記す。

（意見文・論説文・提案文）

第2学年

単元・教材名と学習活動

比べて分かったことを書く

『同じところ、ちがうところ』

- ・二つのものを比べて、同じところと違うところを整理して文章に書く。

紹介する文章を書く

『この人を紹介します』

- ・身の回りの人で紹介したい人を紹介する文章を書く。

指導参考例

- ・二つのものを比べて表にしたものをもとに文章を書く。120字程度。

- ・紹介する人を決め、紹介内容をカードに整理し、書いた文章を読み合う。320字程度。

第3学年

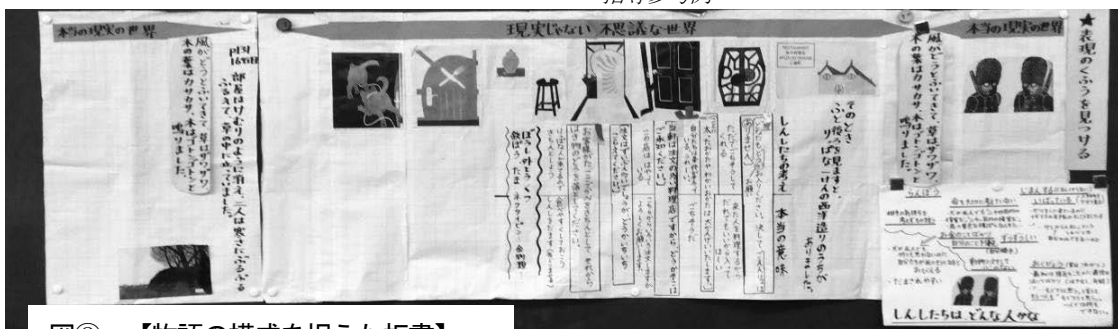
単元・教材名と学習活動

文章のよいところを伝え合う

『わたしのベストブック』を作ろう

- ・よくかけた文章をまとめて「わたしのベストブック」を作る。

指導参考例



図③ 【物語の構成を捉えた板書】

- ・これまでに書いた文章を読み返しがんばったよカードに工夫したところを書き読み合い、賞状を贈る。

第5年生

単元・教材名と学習活動

反対意見を考えて書く

『反対の立場をを考えて意見文を書こう』

- ・自分の意見と反対の立場の人を説得するにはどのような書き方をすればよいのかを考え、感想を伝え合う。

指導参考例

- ・テーマについて考えを整理し、反対意見を予想して対応を考える。
- ・構成メモを使って文章の構成を考え、意見文を書く。
- ・読み合い感想を伝え合う。750字程度。

第6学年

単元・教材名と学習活動

説得力のある意見文を書く

『世界に目を向けて意見文を書こう』

目的や意図に応じた書き方

- ・資料を使って説得力のある意見文を書く。

指導参考例

- ・資料を読み取り考えを深め、文章の構成をを考えて意見文を書く。800字から1000字程度。

(手紙文)

第2学年

単元・教材名と学習活動

手紙を書く

『「ありがとう」をつたえよう』

- ・「ありがとう」と伝えたい人へ手紙を書いて気持ちを伝える。

指導参考例

- ・手紙を書くことを考えて書き、読み返して仕上げる。140字程度。

第3学年

単元・教材名と学習活動

大事なことを手紙で伝える

『案内の手紙を書こう』

- ・身近な人に、学校やクラス行事を案内する手紙を書く。

指導参考例

- ・案内の手紙を書くときに大事なことを考えながら、手紙に書くことをたしかめ、下書きをし手紙を完成させる。300字程度。
- ・宛名の書き方

第4学年

単元・教材名と学習活動

相手や目的をを考えて手紙を書く

『お願いやお礼のお手紙を書こう』

- ・お願いやお礼など、要件に合わせて手紙を書く。文章のよいところをたしかめる『「言葉のタイムカプセル」を残そう』
- ・十年後の自分に向けて今の自分のことを伝える「言葉のタイムカプセル」を作る。

指導参考例

- ・相手や目的がわかるように用件をはっきり具体的に書く。
- ・手紙の形式、前文、本文、末文、後付けに気をつけて書き、読み返す。
- ・四年生になってからの一年間に書いてきた文章を1冊にまとめて文集を作る。
- ・十年後の自分に手紙を書く。300字程度。

おわりに

2つの事例から見えてきたことは、既習の教材を使って比べながら考えるということ（いわゆる説明文において筆者が言いたいことをどのような事例を使って、どのような構成で組み立てているのか）、そして、前単元までの物語文における読みの方法（あらすじ、文章構成、心情描写や行動描写から気持ちを読み取る方法等）を振り返りながら新たな読みに向わせることで、確かな読みにつながるということが分かったといえる。このように、指導者1人1人が、「この教材で付けなければならない力を把握し、確実に習得させること」の積み上げ、つまり系統的な学習によって国語の力がつくのではないかということがいえる。

本年度、和歌山市において国語科の教科用図書が東京書籍に変わった。これを機に、小倉小学校の宇治田教諭は、「書くこと」領域においてつけるべき力を表現様式別に系統表に整理した。これを見ると、手紙文の書き方（時候の挨拶、結びの挨拶、後付けの書き方）は、3年生で学習した後、どの学年でも学習する機会がないことが分かる。国語の目標の1つである「日常生活に生かす力」として発揮するには、1度きりの学習では不十分である。スパイラルに学習を積み重ねていく必要がある。その1つとして、米田教諭は、言語活動に「筆者に手紙を送ろう」を設定したのは大変良い試みであったと考える。来年度は、他の領域についても系統表にまとめ、指導者が意識し、繰り返し指導していくことによって、子どもたちに着実に力が付くであろう実践を積み上げていきたい。